
ロリコン・コンプレックス！

佐藤みりん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコン・コンプレックス！

【Nコード】

N6010Z

【作者名】

佐藤みりん

【あらすじ】

小学生みたいな身長体型がコンプレックスの女子高校生、佐々木ゆみ。そんな彼女には好きな人がいる。

けれども、その恋の道は険しかった。何せ片恋の相手は学校中で噂になるほどの人物なのだ。学校一のイケ面で、定期テストの上位常連、その癖スポーツ万能、そして……真正のロリコン、だからだ。

「わたしの好きな人は、ロリコンです」　これはそんな一行目から始まって、迫りくる障害なんて跳ね飛ばし、立ちふさがる常識の壁を突き破る、恋に生き愛へとひた進む女の子の、ピュアラ

ブ
ス
ト
ー
リ
ー
。

その1 らぶらぶ

わたしの好きな人は、ロリコンです。

ある日、わたしは言いました。

「先輩、わたしの胸はぺったんこです」

わたしは胸に手を当て、ずっと先輩の目の前に立ちふさがりました。

わたしのいまいる場所は先輩の部屋です。椅子に座って何やら本を読んでいた先輩は、目の前に屹立するわたしに一瞬だけ視線を上げ、そしてすぐに戻しました。

「そうだね。ぺったんこだね。ちなみに君は、ぺったんこの語源は知っているかな」

「無論です」

落ち着きをはらって言葉を返す先輩は、わたしの逆セクハラ発言に対してちつともあわてていません。あっさりと肯定してみせただころか、さりげなく話題を変えようとしています。

わたしからのセクハラに慣れたのでしょうか。ちなみにぺったんこの語源は諸説ありますが、もちつきの際にぺったんぺったんと音

が鳴ることからという話を聞いたことがあります。真偽は知りません。

先輩の冷たい態度にも、わたしは揺るがずめげずに続けました。

「背だつてちっちゃいですし顔だつてくりくりの童顔です。制服を着ていても中学生、私服で男子の友達と繁華街を歩いていたときは小学生と間違えられて、一緒にいたその男友達が条例違反の容疑で補導されたこともあります」

「それはその人も災難だったね……というか、自分で言っていて悲しくならないかな」

「そうですね。昔は確かに鏡を見るたびに落ち込みましたし着る服が限られて泣きたくまりました。中学一年生の折に勇気を出して梓ちゃんと初めてブラを買いに行った時、一緒に行った彼女がAだのBだの店員さんと相談しているのに、わたしといえばサイズを計った時にまるでちよつと背伸びをした小学四年生をみるかのような微妙な笑顔で『お客様……まだご必要ではないのでは？』といわれてそれでもスポーツブラとか子供用のじゃないちゃんとしたブラが欲しかったので喰い下がってその結果『申し訳ありません。当店にはAAやAAAの在庫はございません』と謝られたというトラウマはいまでも忘れられませんが、それでもいまは悲しくなんてありません！生まれ変わったんです！むしろ先輩のニーズにこたえられることを喜ばしく思ってます！ほら先輩！ちっちゃくまな板で小学生ばりの童顔！ムラムラしませんかっ？」

わたしは顔を喜色に染めてずいっと顔を近づけます。その距離、五センチ。高鳴る心音は伝えられなくても、わたしのあらぶる吐息が先輩に伝わる距離です。

先輩は非常に嫌そうな表情で顔をそむけました。

「しないよ。君は僕の好みではないからね」

淡々とした答え。わたしはそれに、むむむと眉を寄せました。

こんなにかわいい女の子が迫っているというのに、なんて気のない反応でしょうか。それとも先輩の読んでいる本は、鼻先に迫っている女の子よりも心ひかれるものなのでしょうか。

二次元ですらない文字の集合体ごときに敗北するなど、わたしの女としてのプライドが許せません。ちらりと本の表紙に目をやりま

す。
先輩の読んでいる本のタイトルは『幼女甲冑の薦め』というものでした。

「……………」

…………… 幼女甲冑って、なんでしょう？ なにやらものすごくハイレベルな匂いがありますけど……。 お客様の中にご存知の方いらっしやいますか？ いらっしやいましたら、ご起立お願いします。その後、条例違反で警察に自首してくださいませー、とか一瞬そのカオスさにキャビンアテンダントごっこをしかけたが、踏みとどまります。くじけません。わたしの恋はこんなことで折れるわけにはいかないのです！

こうなれば、実力行使しかありません。

わたしは先ほど意図して近付いた先輩の顔を見ました。理知的で整った顔。ニキビのひとつもないすべすべの頬。凛々しくも涼やかなその表情。そしてメガネ！ クールな美男子がそこにいます。

よし、と決めました。

キスをしてしまおう。

本にできなくてわたしにできることは多々ありますが、その筆頭たるものが肉体的接触コミュニケーションであることは疑いの余地ありません。まして、いまこは先輩の家で先輩の部屋の中です。そして先輩の部屋にいるのは、わたしと先輩だけです。ようするに、

密室で男女がふたりきりなのです。

これはやってしまっても問題ないでしょう。

いえ、むしろやってしまえという天啓ではないのでしょうか。そう、AをきっかけにBに移行しCまでゴーという神のお告げに違いありません！

先輩の隙について……いまだ！

「何やってんのよ、ゆみ！」

と思ったその時、ばんつと音を立てて扉が開きました。

「あれ、梓ちゃん」

「やつと来たか梓」

わたしと先輩の声がぴつたり重なりました。

バッドタイミングでわたしの名前を呼んで部屋に飛び込んできたのは、中学生からの友達であり先輩の妹である梓ちゃんです。

実はもともと今日は彼女の部屋にお呼ばれていたのです。わたしが先輩の部屋にいるのは残念ながら両者の同意のもとではなく、梓ちゃんがお手洗いに行っている間に彼女の部屋を抜け出し、勝手に先輩の部屋に入りこんだからにすぎません。

梓ちゃんはわたしの正反対にあるといつてもよい見事なプロモーションをしている、大人びた美人さんです。冬休みを終えれば高校二年になる彼女ですが、それを知らない人が見れば実際年齢より二つ三つ上の女子大生に見えるでしょう。

梓ちゃんは背筋をぴんと伸ばして声を張り上げました。

「早くその変態から離れなさい。襲われるわよ！」

「そんなんっ、梓ちゃん！ わたしと先輩を引き離さないでください！」

「おいおい梓。飯にも友達を変態だなんてひどいんじゃないかい？」

その言葉に、梓ちゃんの眉がぴくりと反応しました。

「……はあ？」

憎しみを舌にのせ、なに言つてのこいつ、といわんばかりに顔をしかめます。梓ちゃんの動きに合わせて、腰まで伸びた黒髪がさらに流れました。

「あのねえ……」

そうして梓ちゃんがゆっくり視線を合わせたのは、先輩の方でした。

「アホなの、兄貴？」

梓ちゃんの視線たるや、真冬のツンドラ平原のように冷やかでした。目元がちょっときつめだということもあって、蔑視という言葉を見事に体现する様がとっても似合っています。

「いまのは兄貴に言ったのよ、この変態クソロリコンがつ。ほら、離れなさい、ゆみ。あんた幼児体型だから兄貴の趣味にヒットしかなないのよ。危ないわよ。こっちおいで」

「うにゃんっ」

顔近づけすぎ、と言いながら梓ちゃんがわたしの襟を掴んでひっぱりました。梓ちゃんは「月曜にはあのクソロリコン兄貴を包装用の新聞紙で梱包して焼却処分してやりたい」と暴言を吐くほどの先

輩嫌いなのです。

「梓ちゃん、離してください！」

「だからダメ。そいつが五歳以上十三歳未満にしか興味がない口リコンの変態クズ野郎でもダメ。あんまり無防備すぎるのはよくないわ。そのうち襲われるわよ」

「先輩ならいいですつ。望むところです！ わたしは先輩に襲われないんです！ いえ！ むしろ！ わたしが先輩を襲ってるんです！」

「落ちつけちびっこ！」

じたばたと抵抗するわたしの頭に、びすつと梓ちゃんのチョップが振り下ろされました。

その1 らぶらぶ（後書き）

こんにちは。あのタイトルとあらずじでいったい何名の紳士な方が釣られたか、あのタイトルとあらずじで、本命の淑女の方は見に来てくれるのか、なんだかちよっぴりわくわくしている作者です。あ、一応は断らせていただきますが、あらずじの八割は冗談でできています。

この物語は、大体を書き終えてからの連載となっております。一話を場面ごとに投稿する形になるので、分量は一話につき千文字から五千文字ほどに。平均で二日に一回のペースで投稿していく予定です。

一話目、くすりとでも笑いを誘えましたでしょうか。不安に思いつつも、主人公のゆみに付き合っていただけの懐の広い方がいらっしやることを切に祈りまして。

その2 がやがや（前書き）

前話から時系列がちょっと飛びます。

その2 がやがや

春つらら。

小学生の高学年になる辺りから身体的な成長が止まり、中学生よりちっちゃいっちゃい言われ続けたわたしもいよいよ高校二年生になりました。相変わらずちっちゃい言われているのは変わりませんが、二年生です。一年生の時ほどの新鮮さと始まりの予感はありませんが、それでもちよつと胸がドキドキします。

時計を見ると、八時になる少し前です。ぼつぼつ人も集まってきました。新しいクラスメイトは、全然知らない人もいれば何となく見覚えのある人もいます。運が悪いのでしょうか、親しい友人はいまのところゼロ。さびしいことです。

わたしは何の気なしに校庭を眺めました。桜の花は大部分が散ってしまい、そろそろ葉桜に移ろうかとしています。

そんな春ですが、残念ながら、わたしの恋の桜はまだ咲いていません。

先輩に恋して以来のアタックに次ぐアタック。猛アタックに猛アタック。わたし史上でここまで積極的になったことはないというぐらいの突進アタックを続けたといえますのに、先輩は毛の先ほども私に興味を示してくれませんでした。

理由ははっきりとわかっています。

先輩がロリコンだからです。ロリータ・コンプレックスだからです。合法などには見向きもせず、同年代などもってのほか、五歳以上十三歳未満にしか反応しない、真なるロリコンだからです。

……そういえば、コンプレックスって劣等感という意味ですよ……。しかしコンプレックスと言われて思い浮かぶ単語は、シスコン、ブラコン、ロリコンなどなど犯罪臭しかしないものばかりです。なぜ昨今では変態の代名詞みたいな言葉として普及しているのです。

ようか。

「おはよ、ゆみ」

思い悩んでいますと、声をかけられました。梓ちゃんです。振り返ればそこには、あいかわらず高校生とも思えない大人びた美人さんがいました。

「おはようございます、梓ちゃん」

わたしもぴよこんと頭を下げます。喜ばしいことに、今年も梓ちゃんと同じクラスなのです。

「今日はいいい天気ね。兄貴みたいな変態は、この日の光を浴びたら消え去ってしまいそうなくらいいい陽気」

「先輩はゾンビか吸血鬼ですか……？」

今日の天気さにさりげなく自分の願望を混ぜる梓ちゃんに答えて、ふと思いつきました。そうです。わからないことがあったら、梓ちゃんに聞けばよいのです。

「梓ちゃん。コンプレックスってどういう意味か知っていますか？」

「コンプレックス？ またややこしいこと聞いてきたわね……直訳すると『複合』とか『複雑』よ」

ややこしいと言いつつも、さして考えずにあっさり答えてくれました。梓ちゃん、頭も非常に良いのです。梓ちゃんは決して認めませんが、博覧強記の先輩の影響でしょう。

「複雑……？ はじめて聞きましたけど」

「まあ、そつちはあんまりなじみないわよね。日本語的な用法で『劣等感』って使われているのは、微妙に誤用なのよ。まあ、厳密には誤用とも言いづらいけど……。ちなみにコンプレックスはフェティシズム——俗にいうフェチとほぼ同義に使われることもあるから、ファザコンとかシスコンとかいう使われ方もするの」

わかりやすくするためにだいぶ省略したから詳しくは自分で調べて、と言って話を切り上げました。

うん、勉強になりました。あまり簡単に人に聞きだすクセをつけるものではないでしょう。知りたいことを自分で調べるということは、自己を独立させる第一歩でもあります。

そうして梓ちゃんとおしゃべりをしていますと

「やつほう、藤堂梓と佐々木ゆみ！ 今年も同じクラスか！ 嬉しいよ！」

「なんだなんだー。まだホームルームもやってないのに授業してるのかー」

声をかけてきたのは去年も同じクラスだった二人です。成績はもといその行動がおバカで有名なコンビ

です。最初に声をかけてきた元気のいいショートカットの方が黒衣莉由、間延びした口調のふわふわ髪のほうが白木岸祢。通称、白黒コンビで先生からも二人セットで目をつけられています。

「おはようございます、おふたりとも」

このふたりも一緒のクラスなんですね。残念です。

梓ちゃんもわたしと同意見なようで、ふたりを見るや目を剣呑に尖らせました。

「何よ、あんたら同じクラスじゃないでしょう。ていうか階が違うわよ。二階じゃなくて、一階でしょ」

ちなみにうちの学校は、一階が一年生、二階が二年生、三階が三年生という具合に教室が区切られています。

「ちょっと待て！ 留年なんてしてないぞ。あっちだけならともかく、あたしは違う！」

「おい！。うちにはかじゃないぞー。あっちだけなら、まず間違はなくそうだけどなー」

邪険にあしらう梓ちゃんに、おバカのふたりは互いを指差しました。

ふむ、つまりは

「なるほど。要するに二人とも留年なんですネ。どうぞ仲良く一階へゴーしてください」

「なに！」

「むうー」

親指を下に向けてみせると、ばかり、と二人の視線が力チ合います。

「お前が馬鹿なせいだ！」

「アホがいるからだろー」

そのまま見ていますと、どっちが真のバカかの論争が始まりました。おバカのふたりはあいかわらず仲が良いようです。

梓ちゃんがため息をつきました。

「新学年になったっていうのにやかましいわね、バカどもは」

「でも梓ちゃんは物知りで教え方も幅広いので、よい教師になれると思いますよ。ほら。古典の山川先生とかよりはずっと」

あの白黒コンビが進級できたのは、間違いなくテスト前に開いていた梓ちゃんの勉強会のおかげです。

「ゆみも膨らませない」

「あう」

こつんとこづかれました。意外とわっしょい攻撃に弱い梓ちゃんは照れているらしく、ちよっと頬を紅潮させていました。

「それより放課後の同好会、行く？」

「無論です」

わたしは力強く頷きました。

同好会というのは、わたしと梓ちゃんと先輩の三人で形成されているものです。ということは、先輩と確実に出会えるチャンスです。先輩と同じ部屋にいられるのです。先輩と同じ空気が吸えるのです。

「地球が割れても行きますとも！」

それで行かないわけがありません。わたしは先輩を愛しているのです。

「あっそ」

鼻息を荒くするわたしの頭に、梓ちゃんはぽんと頭に手を置きました。

「ま、とりあえずホームルームと始業式が先ね」

やれやれとため息をついて、梓ちゃんが自分の席に向かいます。おバカの二人の論争の決着を待たず、キンコーンカーンコーンとチャイムが鳴り、同時に先生が入ってきました。

「おい、その白黒二人は新学期初日から何やってるんだ。始業式前から早々に生徒指導室に行きたいのかお前らは」

去年の生徒指導を担当していた体育教師が、今年は担任のようです。そのお言葉に、ふたりはびくりと身を震わせて大人しくなりました。

今日は平和な日になりそうです。

その3 めらめら

わたしと梓ちゃんとはとことこ廊下を歩いていました。

「終わりましたね」

「終わったわねー」

梓ちゃんがぐぐつと背伸びをしました。

今日は始業式とホームルームだけなので、早く終わっています。クラスは梓ちゃんとおバカのふたりを筆頭に、女子の知り合いが結構いたのですね。ちなみに始業式を妨害したおバカの二人は生活指導室行きです。

男子は見知ったのが何人か、それにひとりだけ去年仲良かったのがいましたが……うん、あれは見なかったことにしましょう。

「バカふたりはあいかわらずバカだったわね」

「変わらないので、安心できますけどね。あのふたりを見てるとなごみますよ」

「そう？　しかし学校側もよくあの二人を同じクラスにしたわよね。始業式そうそうやらかしてるしさあ」

「問題児をまとめて見はりやすくしたんじゃないですか？　生徒指導の中村が担任になったのって、どう考えてもあのふたりのせいです」

「いや、それでも普通別々に分けるって」

おバカのふたりをネタにほのぼのと会話を交わします。

いまはまだ昼前。時計をみると十一時を少しまわったところでした。

始業式はぴかぴかの一年生を見た以外、校長の話も退屈で特に印象もなく終わりました。

「この後は同好会ね」

「そうですね」

地域福祉同好会。

それがわたしと梓ちゃんが所属しており、また去年先輩が入学早々に立ち上げた同好会の名前です。

その活動内容は、地元のボランティアに参加しまくるという同好会です。遊びたい盛りの高校生ではいつさいの魅力を感じられないこと間違いなしの、存在理由を疑ってしまうような活動内容でしょう。

同好会の強いて得になる点を上げるならば、内申が良くなるくらいでしょうか。奉仕活動が好きで好きでたまらないという変わった嗜好の持ち主でもない限りは、活動に惹かれて入りたいとは思いうなとこではありません。まあ、わたしからすれば、先輩がいるというその一点で全ての悪条件は払拭されます。

ちなみに去年の冬までには同好会員は先輩と梓ちゃんの藤堂兄妹ふたりでした。一年の冬休み明けにわたしが加入し、現在では三名になっています。

規模的に見れば非常にちっぽけな団体です。あくまで同好会であり部活ですらないのになぜ部屋が与えられたかといえば、非常に学校に都合がよいからでしょう。去年の半年ほどを真面目に活動してから、部室が与えられたらしいです。

わたしたち地域福祉同好会は確かに学校の評判にプラスになる要素しかない同好会です。その上、わたし達は非常に真面目に活動しています。傍から見れば健全この上ない同好会でしょう。

ただ、先生方は気がついていないのでしょうか。

先輩が獲ってくる仕事は、主にというか全て児童福祉のボランテ

イアだということに。

「今日は同好会は会議の日でしたっけ」

同好会の活動は基本、ふたつに分かれています。ひとつはボランティア活動そのもの。そしてもうひとつは、数あるボランティア活動の中で何をするか選別して決めるための会議です。

「そうよ」

梓ちゃんは目をぎらぎらと怒らせて頷きました。

あいかわらずヤル気が満ち満ちています。もはや殺気と間違えかねないほどの気を放出しているのは、梓ちゃんが同好会に入ったエピソードに起因するものです。

「相変わらずヤル気に満ちてるといっつか殺る気に満ちているというべきか……まあ、梓ちゃんの目的はそっちですからね」

去年入学したばかりの時分です。児童福祉ばかりやっているという同好会の内容を知った梓ちゃんが怒り狂い「あの兄貴が犯罪行為に走らないように見張ってくれるわ!」と叫び入部したという逸話があるのです。おバカのふたりに聞いたことですが、多分事実でしょう。

よって会議の日、同好会の討論は非常に白熱します。

「絶対、変態兄貴には負けないわよ……! あのロリコンに児童福祉になんて、やらしてたまるもんですか!」

梓ちゃんが、ぐぐつと拳を固めました。気の入れようが半端ではありません。今日も藤堂兄妹の論争が繰り広げられることでしょう。

ふたりの論争は見ただけで面白いものがありますから、構わないのですが。

過剰なまでに気合を入れる梓ちゃんの肩に、ぽんと手を置きました。

「まあ、でもお昼を食べましょうよ。まだ時間がありますし、学食でおしゃべりして時間を潰しましょう」

同好会活動は、一時からです。

「そうね。あのロリコンを叩きつぶすために、しっかり食べないとね」

梓ちゃんが、不敵ながらも怪しい笑顔を浮かべていました。

その4 きらきら

先輩は、ロリコンです。

わたしは先輩のことが大好きですが、先輩はそれと同じくらい幼女を愛しています。先輩がロリコンなのではなく、ロリコンという存在の全般が先輩なのではと思ってしまっただけその愛は無限大であり、彼方に広がる大宇宙と先輩のロリコンさ、そのどちらが広大かと問われたら、わたしは答えることができないでしょう。

では先輩がどれほど幼女を好きか、ついでにわたしがどれくらい先輩のことが好きかを端的に表せるエピソードがあります。少し昔というか始業式の数日前のことです。

ある日、先輩はこう言いました。

「ペットボトルには二種類ある。ただのペットボトルと輝くペットボトルだ」

「輝くペットボトル？」

それは休日のことです。いつものように道行く幼女を眺めて愛するために外出した先輩を、これまたいつものようにわたしがストーキングしていました。三百六十度どこを見渡してもおかしいことなど一点も見当たらない、いつも通りの休日の日常です。

「なんですか、輝くペットボトルって？」

ただ先輩の外出はなぜか追跡者を振り切ろうとするかのようにあちこち場所を移動するために、同行する方としては少々疲れます。先輩が自動販売機で飲み物を買って足を休めたのを合図に、わたし達は休憩をしていました。

「そうだね。例えばこれはただのペットボトルだろう?」

わたしの疑問符に先輩は自分が飲んでいたペットボトルを軽く持ち上げました。すでに飲み終わったようで、その中身は空になっています。

「はい、まあそうですね」

「飲み物が入っていないペットボトルには、普通何の価値もない。けれど十三歳未満の女の子が飲み終わったものは輝くペットボトルとなる。僕の目には、その差の見分けがつくんだよ。十三歳以上の人間が飲んだペットボトルはただのペットボトルでしかないが、五歳以上十三歳未満の女の子が飲んだペットボトルはまばゆいばかりの光を放っているんだ」

どうやら先輩に備わっている幼女感知機能は、人間の域を越えつつあるようです。

さすがに啞然としていますと、先輩は飲み終わったペットボトルを自動販売機の脇においてあるゴミ箱に入れました。

「このゴミ箱にはないね。あればそれを収集して水筒代わり使うんだが……残念だ」

「では先輩。これを進呈します。輝いてますか?」

「いやいらないよ。ただのペットボトルなんて、ゴミでしかない」

わたしが自分の飲み終わったペットボトルを見せると、先輩は首を横にふりました。

なんとも素っ気ない反応です。思春期の男であるならば、女の子が口をつけたペットボトルを前にすれば「間接キス!？」と胸をどぎまぎさせるのが一般的な反応ではないのでしょうか。

わたしは「むう」と唸ります。

「先輩は五歳以上十三歳未満の女の子にしか興味がないそうですが、そもそもそれは何故ですか？ 十歳を過ぎれば、わたしより発育のよい女の子はちらほらでてきます。幼いからといって純真であるということが幻想なのを承知してないわけでもないでしょう。五歳以上十三歳未満にあつて、わたしにないものとはなんですか？」

「君が六歳でも十歳もなく、いま十六歳であることだよ。そんなことよりもついい加減、付きまとうのはやめてくれ。さすがに僕も疲れるよ」

そう言つて先輩は再び歩き始めました。

先輩の言葉はとても納得のできるものではありません。そもそも理由になつていません。いつもならば先輩の言葉など無視してこことんつきまとうわたしですが、その時はその場で数秒思案しました。

「……………」

わたしの視線の先には、先輩がペットボトルを捨てたゴミ箱がありました。

その5 つづ

キーンコーンカーンコーンと、この学校の誰よりも時間に忠実なチャイムが鳴ります。いつもなら昼休みの始まりを知らせる鐘にとたん学校中が騒がしくなりますが、入学式があつた今日は午前で終わりのため大半の生徒は帰宅していますから、静かなものです。

「いただきます」

「いただきます」

わたしと梓ちゃんは声を合わせて食事を始めました。学食で、わたしはAランチを。梓ちゃんは、カツ丼を。

……女の子が、かつ丼って、梓ちゃん。

「梓ちゃん、それゲン担ぎですか？」

箸で示してみると、梓ちゃんは何のためらいもなく頷きました。

「そうよ」

「またよくわからないことを……」

「負けられないのよ。変態ごときに、負けるわけにはいかないのよ」
「つ」

そうして他愛もない会話をしながらむしゃむしゃ食っていますと

「そういえばゆみ。あんたもしかして、お金がないの？」

ふと梓ちゃんが心配そうに聞いてきました。いきなりなんでしょ

うか。会話の脈絡なくそう聞かれたので、わたしは首を傾げました。

「いえ？ 潤沢ではないですけど、困っているほどでもありません」
ようするにいつも通りです。

「でもあんた最近そのペットボトルに飲み物入れてくるようになったじゃない。飲み物を買うお金もなくなったんじゃないの？」

梓ちゃんが机に置いたペットボトルを指差して言います。

「ああ」

その指摘で合点がいました。確かに数日前から、同好会活動中でもわたしはこの使用済みのペットボトルを使っていました。

「どうしたの？ なんかあったなら、相談してよ」

梓ちゃんの目はちよつと不安そうで、わたしが窮状にいるんじゃないかと心の底から気遣ってくれていました。

どうやらいらぬ心配をかけてしまったようです。これは早く誤解を解かねばと箸を止めてペットボトルを持ち上げました。

「これは輝くペットボトルです」
「輝くペットボトル？」

怪訝な様子の梓ちゃんにわたしは力強く頷きました。

「はい。これは梓ちゃんのお兄さんである先輩が口を付けて飲んだペットボ——」

「飛んでけ彼方に！」

「ああ、なにを！」

みなまで言わず梓ちゃんがわたしの手からペットボトルをもぎ取ってベキメシヤと音を立てて握りつぶし窓の外に力一杯放り投げました。野球部もびつくりの遠投であり、握力です。

わたしはあわてて窓枠に手を付いて追いますが……残念なことに最近わたしに備わった先輩感知機能を持っても、輝くペットボトルのきらめきがどこに飛ばされたのか分かりません。

わたしは涙目になって振り返りました。

「梓ちゃん、窓から物を投げたらいけません！」

「何を常識ぶってんのよ！ アホなのあんたは！ 兄貴の使ってたペットボトルだ？ どこから手に入れたか知らないけど、おぞましいわよつ。さすがにドン引きよ！」

「え……だってちゃんと洗いましたよ？ 本当は洗わずに使いたかったんですけど、ゴミ箱から取り出したものですし衛生上良くないなということ。それに何日も洗わずにいると飲み口から雑菌が繁殖しますからね」

「ゴミ箱からつ……？」

梓ちゃんの顔がひきつりました。その目は思考回路からして理解できない異星人の文化風習を見る目でした。

「ほえ？」

なにかまずいことをしましたでしょうか。わたしは、ぱちくり瞬きをひとつ。

「だって、先輩もやっていることですよ？」

「あのバカ兄貴殺す！」

「え、ちょ、梓ちゃん！？」

わたしが制止をする間もありません。

気炎轟々、口から火を噴きかねない勢いで梓ちゃんは学食を飛び出しました。

その6 ばちばち

学食を飛び出た梓ちゃんを追いかけてましたが、体格差からも分かるように、わたしと梓ちゃんでは身体能力に差があります。おバカのふたりとすれ違ってすぐにその背中は見えなくなってしまいました。

それでも出来るショートカットの限りをつくし、肩で息をしながら同好会の部室に飛び込みましたが

「
……」

時すでに遅し。

容姿端麗な藤堂兄妹ふたりが互いに険悪な空気を出していました。そつぽを向きあっているというのに、真正面から睨みあっているかのようにバチバチと火花を散らし合うという器用なことをしています。

ちなみに先輩の顔は平手ではたかれた後のような紅葉模様の赤い痕と拳骨で殴られたような青タンと猫にでもひつかかれたような五本線が引かれています。

あちゃあ、と顔を掌で覆いました。

普段の先輩は温厚です。というか、幼女に関すること以外ではまったく興味を示さず感情的にならずクールな人柄です。元から仲の悪いふたりではありますが、それは梓ちゃんが一方的に先輩を毛嫌いしているからです。見たところ、先輩は梓ちゃんに対して悪感情を抱いていません。常ならば梓ちゃんに嫌悪の感情をぶつけられても涼しい顔で受け流しています。

ですが、人には限度というものがあります。意味も分からずはた

かれ殴られひつかかられば、そりゃ誰だって不機嫌になるでしょう。

「はあ」

わたしはため息をついて梓ちゃんの隣に腰掛けました。先輩の隣に座りたいのは山々ですが、ご機嫌斜めの先輩と梓ちゃんの神経をさらに逆なでも仕方ないでしょう。そこはわきまえます。

しかし、このままでは会議もできません。梓ちゃんの暴力を止められなかった責任もありますし、とりあえず仲裁のため、先輩ラブのスイッチをいったん切りました。

「……梓ちゃん」

「私は悪くないわよ」

そう吐き捨てた後、そっぱを向いて目も合わせません。意思疎通の拒絶を全身で訴えています。

「……もつつ」

これは手のつけようがありません。

梓ちゃんも自分がまったく悪くないと思っているわけではないでしょう。ただ先輩に対してだけは意地をつき通しています。兄を相手に謝るなんて、梓ちゃんからすれば沽券に関わることなのでしょう。

わたしはもうひとりのほうを見ました。

「……先輩」

「僕が何をしたというんだい？」

さすがの先輩もぶすつとしています。

これまたもつともです。もつともすぎて説得の余地がありません。ふむ、と考え込みます。どうしましょう。どうやってこの場を治めましょうか。

いっそのこと何もしないで終了という考えなくはないのですが、来月分のボランティアの予定を決めるまでにあまり時間がありません。この時期ですと新入生勧誘についても話し合わなければいけませんし、進めないことにはこの先困ったことになります。

わたしは心中で唸りながらもふたりを見比べました。

大人っぽく美麗な見た目が良く似ていて、並べば一目で兄妹とわかります。それとこれを言ったら梓ちゃんが本気でぶち切れるので口には決して出しませんが、この兄妹、性格も根っこは似通っているのです。

「……梓ちゃん。話し合いをしましょうよ。ほら、三人で」

無視されました。

「梓ちゃん。そう意地にならないでください」

無視されました。

「……梓ちゃん？」

無視されました。

「……………はあ」

いい加減面倒になりました。

ていうかそういう態度ならばわたしにだって考えがあります。

わたしは席を立って、先輩の隣まで移動しました。

「……ッ」

梓ちゃんの眉がぴくつと動きました。

無視しました。

「先輩。梓ちゃんなんてほっという話し合いしましょう」

「そうだね。今日は梓に話す意志もないみたいだし」

「はい。えへへー。先輩とふたりきりで話しあえるなんて嬉しいです。至上の喜びです」

「それはいいから早く話を進めよう」

わたしと先輩は仲良く会話をします。先輩ラブのスイッチは切ったつもりでしたが、それでも思わずほにやらんと顔がゆるんでいます。

「……ッ」

梓ちゃんの眉がぴくぴくつと動きました。

無視しました。

「でも『ふたりきり』だったら話し合うまでもないですね」

ふたりきり、のところに重点的にアクセントを置きます。

「……ッ！」

梓ちゃんが猛烈な勢いで睨んできました。
無視しました。

「そうだね。一カ月分のボランティア枠は五個しかないからね」

「はい。ではわたしと先輩で持ち合った分で、来月分のボランティア活動はけて——」

「ちよつと待ちなさい！」

とうとう立ち上がって叫びました。頭がいいのに刺激に対する反応が単純なところは、梓ちゃんのかいいところです。

今度は無視しません。

わたしはにつこり笑って振り返りました。

「なんですか、梓ちゃん。文句があるならはつきり言ってください」
「んなことは言われなくてもわかってるわよ！ ゆみのはいいけど、兄貴の持ってきたようないかがわしい活動は絶対認めないからね！」

びしつと先輩を指差して、雄々しく言い放ちます。

「いかがわしいとはなんだ。真つ当な児童福祉じゃないか」

「兄貴がいうと児童福祉がとたんいかがわしくなるのよ！」

「それは言いがかりだろう。少なくとも活動中僕が何か文句を言われたことはないぞ。むしろ感謝されたことしかない」

「だまりなさいよ変態ロリコン！」

「まあ、ふたりとも座ってくださいな」

また手が出たら、仲裁が面倒なことになります。わたしは間に入って主に梓ちゃんをなだめました。

「ほら。気が済むまで話しあいましょう」

「言われるまでもないわ！」

「言うことは特にないかな」

そうしてつつがなく会議が始まりました。

その7　じゆるじゆる

「ちつきしょう、兄貴め」

「まあまあ。そんなことするとスカートめくれますよ」

同好会の会議終了後の下校途中です。わたしは地面を蹴りあげる梓ちゃんをいさめました。

今日の論争の決着はつきませんでした。ボランティア活動は月に五と決めてあります。同好会員がそれぞれ三つずつボランティア活動を見つけてくるのが決まりです。

わたしが取ってきた来月分のボランティア活動は三つともさして議論をするまでもなく認可されました。

そして、残り梓の二つ。この二つが問題です。

梓ちゃんと先輩、藤堂兄妹が持ってきたボランティアですが、全て日にちが被っていたのです。というか、先輩が獲ってくる児童福祉のボランティアを決してやらせまいと、梓ちゃんがわざと日にちを被せているのです。毎度毎度見事に日にちを被せる梓ちゃんの執念たるや恐るべし、というほかありません。その心意気を見ていると、実は梓ちゃん、先輩のことが大好きなんじゃないかと勘違いしてしまいそうになるぐらい大したものなのです。

「今日も激論でしたね」

「クソ兄貴の奴、ヘリクツが異常に上手いのよね」

忌々しげに、もしくは悔しげに言います。

「まあ、梓ちゃんの弁舌も大したものだと思いますけど」

藤堂兄妹の口の達者さでしたら、どっちもどっちに思えます。梓ちゃんも先輩も、会議において退くということは一切しません。先輩の幼女と触れたいという欲求と、そんなことさせるかという梓ちゃんの思いがぶつかり合い、会議は激烈を極めるのです。

そして藤堂兄妹の壮絶な論議は終わりませんでした。

「でも新入生勧誘活動は決まったので良かったです」

勧誘活動は、ビラ張り以外は一切やらないことに決定しました。楽でいいことです。

梓ちゃんは肩をすくめて

「いくら部室があるっていつでも、うちは同好会だもの。しかも三人。正式な部活動に比べてそもそもやれることも少ないし、別に人が欲しいわけでもないしね。はつきりいえば、新入生なんて入んなくてもいいのよ」

潰れても構わない、と暗に言っています。梓ちゃんが同好会に入ったそもその目的は先輩を見張るためですから、本心でしょう。そこらへん、あっさりしています。

実のところ、来年以降なら潰れても構わないというのは同好会員全員の共通意識でもあります。梓ちゃんは先述した通りですし、先輩も自分の欲望……もとい、幼女に対する無償のアガペーを満たすためにこの同好会を作ったので、自分が卒業した後は気にも留めないでしょう。

「そうですね」

わたしも同好会の存続に興味がないところは同じです。愛着がまったくないとはいいいませんが、先輩がいなくなったら、本気で何の

魅力ありません。面倒だという気持ちの比重のほうが大きいのが本心です。

「わたしも先輩が卒業した後、同好会をやっているかどうか疑問ですしね。新入部員なんていないほうが、いつそ後腐れなくつぶせて楽かもしれませんね」

ただ後輩が入ったら、さすがにそうそう止めるわけにもいきません。ボランティアが好きという奇特な人間がいなくても限りませんし、わたしも梓ちゃんも、そこで放り投げられるほど無責任ではないのです。

「……そういえばゆみつて、そもそも兄貴のどこが好きなの？」
「え？」

同好会の未来について話そうとしたのですが、梓ちゃんはわたしの意図しなかったところに反応しました。

「話してませんでしたっけ？」
「うん。聞いてないわ」
「そういえば、そうでしたっけ」

そういえばそれは梓ちゃんにも打ち明けていなかったことでした。先輩を好きな理由。それはなんていうか、わたしからしてみれば考えるまでもないことだったからです。

でも梓ちゃんは「ロリコンは死滅しろ。消え失せる。人類のゴミだ。火曜日には燃えろ」と口癖のように呟き先輩を毛嫌いしています。わたしのその愛が理解できないのも道理。そういう疑問が出てくるのも当然でしょう。

「だって先輩はカッコいいですし頭もいいですよ。体育の授業を見た限り、運動神経だって大したものでした。体育館でのバスケのミニゲームで、先輩は活躍していましたよ」

「あんた、去年の三学期から授業の時になぜかいなくなることがあったけど、まさか兄貴の授業をのぞきに……？」

授業など、先輩の汗を流す姿を見る価値に比べればささいなものです。

「見た目良し、成績良し、運動神経良し。パーフェクトではありませんか」

「ロリコンじゃなければね」

それが全て、というように梓ちゃんが憂い気に瞼を落とします。そういった小さな仕草も大人っぽくて様になっています。

「あんた、あの変態兄貴が身内にいる私の気持ちかわかる？」
「代わってください」

即座にわたしは切り返します。

先輩と一緒にの家。なんという理想郷でしょうか。いえ、天国？はたまた桃源郷？それともそこはヴァルハラ？もう！ロマンチックが止まらないではありませんか！

「……□元」
「おっと」

梓ちゃんの指摘に、わたしはあふれ出たよだれをじゅるりとぬぐいました。

「しかし一緒の家……うふふへへ、やりたい放題ですね。梓ちゃん、さっそく戸籍変更の手続きを。養子縁組を活用すれば、住む家を何とか変えられるはずです」

「……そう。じゃあこう考えてみなさい」

ひどく疲れた様子の梓ちゃんが、言葉を変えます。

「あなたの父親は、重度のロリコンです。世間にはばかることなく、ロリコングッズを買いあさっています。食事の時には、幼女の話しかしません」

「そんな人、父親じゃありません。いえ人間ですらありません。そうだ異星人に違いありません」

わたしはきつぱりと断じます。

梓ちゃんがほっと息をつきました。

「よかった。常識はまだ残っていたのね。それと同じなのよ」

「先輩はいいですよ。先輩のロリコンは他のロリコンとはロリコンの一線画するロリコンでありロリコンを超えたロリコンなロリコンなのでそのロリコンはロリコンであってもロリコンとして許されるロリコンなのです」

「もうこいつはだめなのかしら……」

どうしたのでしょうか。空が降ってくるかとも杞憂しているかのように、梓ちゃんは世界に絶望した面持ちで茫然と空を仰ぎました。

「……あなた、昔はもつと普通の子だったわよね？ ていうか普通に普通の子だったわよね？ ねえ、いつの間にこんな子になっちゃたのよ。昔は誰かと付き合っている、そこまで盲目猛進じゃなか

つたじゃない。いつ常識を、節度を、社会のやさしいルールを忘れたの？」

「それは先輩の素晴らしさがわたしを作り替えたと言うほかないですね。恋に恋していたわたしはもういません。先輩に出会って初めて恋をし愛するということを知ったのです。常識？ 先輩に対する無限大の愛は、そんな枠に収まりきりません。節度？ 愛を叶えるのに、世間体なんて気にすることがどうして必要なんです。社会のやさしいルール？ そんなものを守っていたら、わたしはいつまでたっても先輩に夜這いをかけることができないではないですか！」

「一生するな」

梓ちゃんは頭痛を堪えるようにこめかみに手を当てています。

「今日久しぶりにあんたをうちに泊める予定だったけど……急速に不安になってきたわ」

「えええっ、約束は守ってくださいよ！」

「ああもうつ。守るけどさあつ。守るけどあんたも法律をきちんと守りなさいよ！？」

「え……も、もちろんですよ！」

「目を泳がすなあ！」

なぜだか知りませんが、梓ちゃんは涙目です。わたしの親友を泣かせるなんて、許せませんね。

「くっそう、最近は偏頭痛がするようになったわよこのバカゆみっ」「大変ですね。心身は互いに影響し合いますから気を付けてくださいね。あと好きなところと言えば、先輩のあまり人を差別しないところとか」

なぜ罵倒されているかいまいち理解できませんでしたが、わたし

は話を続けます。

「……あんたの目は節穴？ あれは何よりも最低な基準で女を差別しているクズ人種のひとつよ」

「またまた。妹である梓ちゃん、先輩の素晴らしさをわかっていないわけないでしょうに。梓ちゃんのアンチ先輩は筋金入りですね。何ですか。実はブラコンだったりしますか。ツンデレの愛情の裏返し表現ですか」

わたしのからかいに烈火のごとく怒りだすかと思えば、梓ちゃんの反応は意外なものでした。

「……そうね」

こめかみを押さえていた手をすっと下ろし、沈痛な面持ちでうつむいていた顔をあげました。

「昔は結構ブラコンだったわ」

「はいいいっ!？」

なんと首肯したのです。

意外、というよりいっそ衝撃的な告白です。わたしは思わず目を丸くしました。

「え、え!？ どういうことですか？ 梓ちゃん、実はライバルだったのですか!？」

狼狽するわたしに対し、過去を幻視するためでしょうか、梓ちゃんがふっと遠い目になります。

「いい兄だったのよ。昔はよく遊びに付き合ってくれて、勉強も教えてくれて、病気になれば母親よりも親身に看病してくれて、どんなわがまま言っても笑顔で答えてくれて、それでも私がいけないことをしたらきちんとたしなめてくれたわ。あんたのいう通り見た目だっていいし運動神経も人並み以上。それで頭もいっぺいというんだから友達からだって羨ましがられた。あれが私の兄なんだって、誇らしくすらあったわよ。胸に飛び込んで懷かすにはおられない、鼻高々と自慢せずにはおられない、そんな理想の兄と言ってよかったの。昔はそりゃ優しくかったのよ。昔は……そう」

そこで梓ちゃんわたしとぴたりと視線を合わせました。

「私が十三歳になるまではね」

全然意外な告白ではありませんでした。

「あ、なるほどー」

それ以上の言葉はいりません。かわいさ余って憎さ百倍。坊主憎けりや袈裟まで憎し。そんなことわざが思い出されました。

「身内にまでそんなのだから、諦めたほうがいいわよ」

投げやりに梓ちゃんが忠告します。

その言葉には、これ以上にないほど納得できました。

梓ちゃんの先輩嫌いもただ単純な問題ではないようです。一言では語れない過去があり、その因果がいまにつながっているのです。う。

しかしそれで諦めるかといえ、そんなことはありません。わたしはしばらく無言でしたが、ふと語り始めました。

「わたしが先輩と初めて会ったのはですね、ふらっとひとりで道を歩いていた時です」

「……へえ」

わたしが真剣に告白しようとしているのを悟ったのでしょうか。梓ちゃんはこくりと頷きました。

「わたしはその時、とある事情でちょっと気分が落ち込んでいました。傷心であてもなく道を歩いていました。その道すがら泣いている女の子を見かけたのです。ぶっちゃけわたしは子供が嫌いなのでただ通りすぎようと思いました。でもその女の子に先輩がそっと近づき優しい笑顔で頭を撫で慰めてあげたのです。そんな優しさの溢れる先輩の行為にわたしは……」

「勘違いしないでよ！ その笑みの擬音は『ぐへへへ』とかそんなところよ！」

梓ちゃんがナイスツンデレでもっともな主張をします。

なるほど確かに彼女の言う通りではあるのでしょうか。あの優しい微笑みは仮面であり、それをひっぺはがしたならば表れるのは『ぐへへへ』でしょう。
しかし

「まあ、それはそれで構わないです」

「構えアホ！ 何よ。何よ何よ！ まさかそれで惚れたの？ バツじゃないの！ 大バカよ！ 下手したらあの二人よりバカよ！？」

「いえ、おバカの二人よりっていうのはさすがに……それに大事なのはその後です。それでですね、わたしは先輩を――」
「うるさいっ、もう聞きたくない！」

これからがよいところだといつのに、梓ちゃんはそう叫んで耳をふさいでしまいました。

その8 しんしん

昔のことを話しましょう。

ある日、わたしの好きだった人は言いました。

「あんな小学生みたいなのと、付き合えるかよ」

放課後の教室に忘れ物を取りに行った際、偶然にもそこでわたしの片恋の相手が友人数名と恋愛談議に花を咲かせているのが聞こえ、つい気になって聞き耳を立ててしまったのです。

そうしていたら、盗み聞きの大罰でしょうか。その言葉がわたしの片恋の口から出てきました。

「……………」

教室の扉越しでそれを聞いていたわたしは、ふいとそこを離れました。

忘れ物を取ることもなく、わたしは家に帰りました。学校から家に着くのは無意識にできて、どうやって帰ったのかさっぱり思い出せないほどです。そのまま部屋にこもろうとして、でもじっとしているだけでは泣いてしまいそうでした。

わたしは私服に着替えて外に出ました。

行くあてもなく、ぶらりと道を歩きます。冬の空気は冷たく、吐く息は白くなり、時折吹く風は冷たく、優しくない冷気がしんしんと肌を刺すなか、歩きます。人通りもない路地道は静謐ですらあって、澄み切った湖の底にいるかのようでした。

ただ、歩きます。途中、友達の梓ちゃんやおバカのふたりところに行こうかとも思いましたが、きつと話しているうちに泣いてしま

うでしょう。愚痴をぶちまけても、涙は見せたくありません。それは、わたしのささやかなプライドと信念が、決して許さないことだからです。

だから、ひとりで考えます。

さむいほどにひとりぼっちで。片恋相手の彼のことを。好きだった彼の言葉を。

彼に悪気はなかったのでしょうか。もしかしたら、からかわれての照れ隠しだったかもしれません。わたし達は結構仲良しでしたから、それをネタにからかわれることは大いにありそうです。

でも、シヨックでした。

もともと惚れっぽい性格のわたしです。告白してフラれたことも付き合っている相手と別れたこともあります。その度にわたしは経験を積んで、タフになったつもりです。

ただそれでもあの言葉はわたしの恋心をざっくり傷つけるぐらいの威力がありました。心をさまして、彼をいっぺんに嫌いにさせるほど聞きたくない言葉でした。

そうしてただ歩いていた時でした。

ふと、泣き声が聞こえました。振り返ると、ランドセルを背負った小学校の低学年とおぼしき少女がそこにいます。

いつの間にそこいたのかは知りません。ほとんど周りを見ずにいたので、気がつかなくて当たり前です。何故泣いているのか見当もつきません。ただ転んだだけかもしれません。迷子なのかも知れません。もしかしたら深刻な事情があるのかもしれない。

ただ。

わたしは微かにいらっしました。自分の容姿にコンプレックスのあるわたしはその合わせ鏡のような存在である子供が嫌い、また今の気分はどん底にあるのです。そこにかん高い子供共の泣き声がつきささったら、どうなるかなんて言うまでもないでしょう。

泣けば解決するなんていう自立精神のない思考は、大嫌いです。わたしはそのまま角を曲がってわんわんと喚く子供を見過ごそうと

しました。

けれど、女の子に近づく人を見つけてわたしは思わず足を止めました。

その人に見覚えがあったのです。

それはロリコンと名高い学校の先輩でした。確か梓ちゃんの兄でもあった人です。梓ちゃんは「兄貴？ 私の家にそんなロリコンは存在しないわ」と断言し、彼を徹底的に毛嫌いしていてわたしに会わせようとはしなかったので直接の面識はありませんでしたが、二度三度遠目で見たことはあったので顔くらいは知っていました。

何となく陰からのぞき見をしてしまいます。笑顔で女の子の頭を撫でていたその人は、しばらくして女の子が泣きやむと笑顔で手を振り見送りました。ロリコンという噂を知らなければ、親切なお兄さんが女の子を慰めているほほえましい場面に見えたでしょう。ただ、彼の本性を知っているわたしには『ぐへへへ』という下心が透いて見えました。

くだらない。

心の底からそう思いました。

踵を返そうとして、しかし一部始終を見ていたわたしはふと閃きました。

それは悪意のある思いつきでした。少し自虐的な行動でもありました。普段なら思いつくことすらなかったでしょうし、行動に移すようなことは万が一にもしなかったでしょう。

でも、いまは。

「……」

わたしは曲がり角から出て、ロリコンだというその人に近づいていきます。歩いている途中に不安げな表情を作り、目前にいるその人に対して少し舌つたらずになるように意識して話かけました。

「あの、お兄さん。道にまよっちゃったの」

上目づかいでその人を見上げ、瞳を涙で潤ませることすらやっ
てのけました。

からかってやれ、と思ったのです。ロリコンの男に小学生のフリ
をして近付いて勘違いさせようと思ったのです。本当に自己満足で、
理屈すらついていません。それでも、そんな手段を使っても、し
よせん男なんてそんなものなんだと溜飲を下げたかったのです。
けれども、わたしの思惑はあっさり外されました。

「道に迷った？ 君は高校生だろう？」

その人の指摘に、えっ、と面食らいました。

「よそから来たのかい。まあそれにしてもその年で迷子とは……と
りあえず案内するか。駅はこっちだよ」

そういつてその人は歩き始めました。呆然としていたわたしはあ
わててその人を追いかけます。

「な、なんでわたしが高校生だつて分かったんですか？」

「君はどう見ても十六歳じゃないか」

ぴたりと年齢を言い当てられました。

「……」

この人の目はどうなっているのでしょうか。騙そうとした罪悪感と
気まずさから、何も言えなくなってしまうました。

わたしはうつむきながら横を歩きます。その人の方から話しかけ

てくることもありません。

しばらく、無言でそうしていました。

「どう見てもと言いますけど」

言葉を漏らしたのは、そんなおもつくるしい沈黙に耐えきれなかったから、というわけではありません。

ただ、もっと別のもの耐えきれなかったからなのでしょう。

「わたし、よく中学生に間違えられます」

むしろ高校生に見られたことがあります。ぽつりとこぼした咳きに、その人は非常にどうでもよさそうに頷きました。

「へえ」

「小学生みたいだって言われるのもしばしばです」

「そうか。僕には妹と同じ歳にしか見えないけどね。世の中には目が節穴の人も多いから、君を十三歳未満に含めてしまう人間も多いのだろう。まったく、愚かなことだ」

「はい？」

突然の演説に、目を丸くしてしまいました。

どうしたことでしょうか。この人、小学生という単語を出したとたんぺらぺらと口数が増しましたのです。

「大体ね、世の中の多くの人間は間違っているよ。人間を判断する基準は見た目じゃない。美人だからなんだというんだい？ 歳をとれば、みな変わらない。だからと言って中身で判断するのもまた違う。性格なんて、いくらでも歪んでしまうものじゃないか。清く正しい人間なんて、ただの世間知らずだ。ならば人間の絶対変わらない

いものとはなんだい。絶対的な基準となるものはなんだ。人と人との関係の中にあつて、それに流されないものとはなんだい？ そう。生きてきた年数、つまりは年齢だ。人間は、女を判断するのは年齢なんだよ」

意味不明な論法を使い、堂々と最低なことを言いきっています。

「……は」

ロリコンと言うのは噂にたがわないようです。さりげなく相談してみようか、愚痴をぶつけてやろうかと思っていたのですが、そんな気も失せました。
ただその代わり

「は、あはっ」

お腹の底から、笑いが湧きあがってきました。

「あははっ、あはははは！」

道端で立ち止まり、お腹を抱えて笑ってしまいました。先導していた彼もいぶかしげな顔で振り向きます。

「どうしたんだい？」

「いえもうおかしくって！」

笑い過ぎてちょっと涙が出てきました。目元をこすってそれを拭きとります。

ああ。

ほんとうに、変な人です。

人の価値とは何か。そんなことを語られるとは思いませんでした。

人の関係の中で絶対に変わらないもの。そんなもの、おそらくは血縁関係ぐらいなものでしょう。時がたつことに知り合いも友達も、そして当然恋人だつて常に絶え間ない変化に襲われてしまします。そしてわたしは、そんな悲しくも楽しい変化にこそ価値があると思っています。

ただ、それでも、見た目なんていうわかりやすいものにとらわれず、内面などという流動的なものにも目をくれず、それでも人と人との間に変わらないものを見つけようとするそのロマンチックな思考が、なんだかもうどうしようもないくらい

「ほんとうに、面白くって」

笑ってしまいました。

「そうかい」

「ええ」

外面を重視して、内面で判断するような、根っからのリアリストのわたしには、ちょっと眩しい思考です。

わたしは最後にくすりと笑って、カミングアウトをすることになりました。

「梓ちゃんはわたしなんかよりもっと大人っぽいですよ。スタイルもいいですし、お化粧も上手です。服選びのセンスも素敵ですね」

何より自分を磨くことに手を抜かない彼女を、わたしは尊敬しています。

「……ん？ 妹を知っているのかい？」

「梓ちゃんとは中学からの友達ですから」

「じゃあ同じ高校？」

「はい。あなたの後輩になります」

「へえ」

やっぱり興味なさげに頷くその人、いえ、先輩にわたしは立ち止まりました。

「ありがとうございます」

頭を下げます。お礼と、何より謝罪の意を込めて、深々と。

「ここまでくればもう道は分かります」

「じゃあ気をつけて」

「はい、先輩」

手を振ると、先輩はあっさり立ち去って行きました。高校生にもなった地元の間が、ここらで道に迷うというありえない矛盾に気がついていないわけでもないでしょうに、そこをついてくることもありませんでした。

本気でわたしのことに一欠片も興味がないのでしょうか。先ほどの女の子に見せたような笑顔は欠片もありません。

それでも。

わたしはそつと自分の胸に手を当てました。

ああ、こりないな。

とくんとくん脈打つその鼓動に、我ながら苦笑しました。

その9 わくわく

『恋とはサメのようだ。常に前進しないと死んでしまう』

映画「アニーホール」での台詞です。お泊まりした昨日、梓ちゃんと一緒にDVDで見たその映画の台詞に、わたしは心を打たれました。

なんとという名言でしょうか。これは歴史に残るに違いありません。そんなことを思うほどに共感したのです。

わたしの好きな人はロリコンです。

その性癖は重度なもので、わたしのことなど見向きもしてくれません。

他人は止めておきなよとわたしを制します。

親友に至っては、殴りかかってきかねない勢いでわたしを止めようとします。

それでも止まらないのは、わたしがこの恋を死なせたくはないからです。

人の気持ちは定まらず、ふと足を止めれば目移りしてしまうものです。恋なんてたったの一言で冷めてしまうことがあります。事実、一度止まって死んでしまった恋をわたしは知っています。

ただ、たったの一言で胸があっただくなくなる恋があることもまた知っています。

だからDVDを見たその日に梓ちゃんの家で一泊し、学校に向かう最中わたしは宣言しました。

「ということだ梓ちゃん、わたしの恋はサメのようにノンストップで前進を続けます！」

「……サメ？」

「はい！……っ、うわあっ」

横と一緒に歩いている梓ちゃんを見てわたしはぎょっとしました。

「……別にサメに喩えなくてもいいと思うのよね。回遊魚なら、イワシとかマグロとかでもいいじゃない……。サメだとなんか、止めるのに命がけになりそうで不吉だわ……。マグロでも大変なのに、サメだと止めようがないじゃない……。あいつら集団になるとクジラとか襲うのよ……」

どうしたことでしょう。梓ちゃんはひどく元気がないようです。顔色も悪く、足を引きずるようにして歩を進める彼女は全体的に負のオーラを背負っています。いつもはきりっとしている目にいたっては彼岸をさまよっているかのように虚ろです。

「あ、梓ちゃん？」

「うふふふ……ねえ神様……私、間違ってるかしら……？ 人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られてっていうけどさ……私のしてることは、そんなバチ当たりなことなのかしら……？ 友達が変態に、犯罪者にならないため必死に止めようっていうのは、そんなに悪いことなのかしら……？」

どうやら昨日のお泊まり会での夜更かしがちよっと堪えているようです。梓ちゃんの目には一体ナニが映っているのやら。もはやわたしの呼び掛けも聞こえていない様子でぶつぶつと呟き続けます。

これはいささかアブナイ状態です。どう見ても病んでいます。

実は昨日のお泊まり、梓ちゃんは徹夜をしたのです。明日の授業に備えて早く寝たほうがいいとわたしは忠告したのですが、梓ちゃんは何故か頑ななまでに寝ませんでした。しかたなくわたしは途中で説得とその他の目的をあきらめて睡眠をとったので楽ですが、ど

うやら完全徹夜を果たしたらしい梓ちゃんには朝日が随分と眩しいことでしょう。今日の授業は居眠り必至です。

まったく梓ちゃんたら、わたしの助言を無視するからこうなるのです。これはちよつとお説教が必要でしょう。

「梓ちゃんたら完徹なんて美容と健康に悪いことをするからそう――」

「友達なのよ……兄貴が入ってる最中の風呂場に突入しようとしたり、隙あらば夜中に布団を抜け出して兄貴の部屋の錠前にピッキングを挑んで忍び込もうとしたり、朝は『おはようのチューで目覚ましを！』とかトチ狂ったとしか思えないことをいつて兄貴に突進しようとする奴だけど、わたしの親友なのよ……中学からの大親友なのよ……だから体を張って止めたわ……はがいじめにして、ベッドに叩きこんで、徹夜で見張って、なんとか心変わりするように諭して……でも……あははは……もう疲れちゃったかも……偏頭痛と胃痛に加えて徹夜で暴走サメっこの押さえつけたもの……ふふ……つかれ、たわ……」

「……………」

さすがのわたしも、悪いことしたなと思わなくもありません。

冷や汗がたらつと流れました。先輩への愛と梓ちゃんへの友情は、一応別物なのです。

これはいけません。ちらりと腕時計を確かめてみますと、七時四十四分。始業まで時間の余裕はありますが、肉体的にも精神的にも疲労困憊している梓ちゃんが道半ばで倒れないかどうか心配です。

そうしていると、後ろから背中を叩かれました。

「おはよ、佐々木ゆみ！ 今日もいい朝だな！ それにしても、なんだこれは？ 腐ってるのか？ もしかして巨神兵か？ どうしたんだ？ 早すぎたのか？」

「お前はバカだなー。梓に決まっているだろー。そんなこともわからんとはお前こそ腐ってるだろー。目と頭がー。でも、ゆみー。どうしたこのゾンビはー」

白黒コンビのおバカなふたりでした。

なんてことでしょう。梓ちゃんが心配な今この時に、こんな二人では何の役にも立ちません。

「おふたりともおはようございます。梓ちゃん、ちょっと完徹をしちゃったのでこんな様になってます」

「目が腐ってるだとう！ しかもバカのくせに人のことバカとかいうなよ！ あ、悪いゆみ、後で事情はゆっくり聞く！」

「なにおー。バカにバカと言われるなんて心外すぎるぞー。抗議してやるー。あ、ごめんなー、ゆみー。後で聞くよー」

聞かれたので説明したのですが、おバカのふたりはギヤースカ言い合いを始めていました。ちなみに腐っているのはふたりの縁だと思われます。

「このバカちんめー。学食で、昨日の続きをしてやろうかー」

「やっぱりバカだろー！ お前なんて怖くもなんともないよ！」

「なにをー」

「事実だ！」

変わらずに仲の良いことです。公道の真ん中で恥ずかしげもなく堂々と口喧嘩でやりあっています。

「……えっと、一緒に登校しますか？」

半ば答えを予想しつつも一応聞きますと

「ああ、佐々木ゆみ！ こいつと決着つけなきゃいけないから先に行って！」

「ゆみー。このバカにとどめを刺さなきゃいけないから先に行つてくれー」

遠慮なく先に行くことにしました。

仲良く決闘まがいなことを始めたおバカなふたりは置いていきます。梓ちゃんもよろよろとついてきました。

あのふたり、遅刻したりしませんでしょうか。遅刻して、拳骨のひとつでももらえばいいんですが。

梓ちゃんは先ほどの会話にはちっとも反応しませんでした。いつもは鋭く冷えたツツコミが入るというのに、それが無いとは相当疲れがひどいようです。

「うーん」

少しでも梓ちゃんの疲労を誤魔化す材料はないかと辺りを見渡します。おバカふたりでは反応すらしなかったので、もっと刺激が強いものが必要でしょう。

そうして探していますと

「あ、先輩です」

斜め前方に先輩を発見しました。先輩はランドセルをしょって通学する小学生女兒を観察するため、通学は随分とおおまわりのルートを選ぶのです。なのでわたし達より早く家を出ていたのですが、偶然合流できたようです。

梓ちゃんがぴくりと肩を震わせ反応しました。

「兄貴が……？」

「はい、まだこちらに気がついていなようですけど」

ようやくまともな反応を返してくれた梓ちゃんにこっくりと頷きます。

しかし先輩がいるとなると、梓ちゃんへの罪悪感にばかり囚われるわけにもいきません。わたしの恋はノンストップと宣言したばかりなのです。

ばかりとスイッチが切り替わりました。さてそれでは行きましょう。さっそくサメのように先輩のハートに食らいつこう。そう走らそうとしましたが

「ねえ、ゆみ」

それを梓ちゃんが止めました。さっきまでの生気のない声と違って、力のこもった声音でわたしの足を止めました。

「ひとつ、そういえば言ってなかったけど、私があんたを止めるのは何もあいつが変態だからというだけじゃないわ」

わたしは無言で振り返って梓ちゃんと向きあいました。梓ちゃんの目は真剣で、まっすぐで、逃げることなんか許されない力がありました。

「梓ちゃん？」

「ゆみ」

梓ちゃんは、言います。

「あいつは、真正のロリコンよ。ガチで少女にしか興味がないわ」

はつきりと、いつものような嫌悪からの言葉ではないようです。
もつと真摯に訴えかける言葉でした。

わたしは頷きました。

「知ってます」

いまさら、そんなことは。

「あなたの恋は、叶わないわよ」

「それも、知ってます」

あの日、先輩に恋をしてからずっと。

「辛い思いをするだけよ」

「百も承知」

とうに覚悟はできています。

「あなた……」

「梓ちゃん」

どこか呆然とした様子の梓ちゃんに、わたしはにっこり笑いました。

「それでもわたしは先輩が好きなんです」

ずっとずっと、自分の体が嫌いでした。小学生の頃からちつとも成長しない体が、大嫌いでした。年相応でない見かけが、我慢なりませんでした。梓ちゃんやほかの友人達の成長していくさまが、妬

ましくてなりませんでした。小学生みたい、とからかわれるのが嫌で、その言葉は恋心をいっぺんに冷やしきるほどに耳にしたくないものでした。

けれども先輩は見抜いてくれました。

先輩がわたしのことを子供扱いすることは決してありません。それは先輩の愛する幼女を侮辱することになるからです。先輩にとって、わたしは間違いなく高校生の女の子なのです。

幼女とそれ以外を見分けるために極限まで磨かれた年齢識別の眼力。先輩を好きになったきっかけは、極められた真正なまでのロリコンさです。そして、この恋の障害も先輩の真正なまでのロリコンさに他なりません。

皮肉なことには違いありません。

でも、それでも。

「梓ちゃん、わたしは絶対止まりません」

満面の笑みで、言い切ります。

「そう」

それに梓ちゃんは、ため息を一つ。

そして、いつものきりつとした目でわたしをまっすぐに射抜きました。

「それでも、わたしは止めてみせるわよ」

梓ちゃんの敵対宣言。

わたしは親友からのそれに不敵な笑みを返して、一步、前へ。

「やってみればいいんですよ。ほらっ」

「あ、ちょっ、まてっ」

止めようとする梓ちゃんの手をすり抜けて、二歩目、三歩目。わたしは走り出しました。

恋をするのに、真っ直ぐすすむ必要はありません。海の中を泳ぐサメのように、自由に、したたかに、身をくねらせながら、叶わずともいいから、この恋が死んでしまわないように。

わたしは走ります。

「こらーっ、待てっつつてんでしょう!」

「いーやーでーすーよ!」

追いかける親友を軽やかに振りきって。

途中、駆け寄るわたしに気がついて嫌そうな顔で振り返った先輩に満面の笑顔を送って。

わたしは、泳ぐように走りました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6010z/>

ロリコン・コンプレックス！

2011年12月28日19時55分発行